阿弥陀

短編

山

夜の山を一人歩く

YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

ある男の臨終

山中與隆

目次

阿弥陀山　1
編者あとがき　54

阿弥陀山

作　山中與隆

静かな夕方である。彼方の大峰山から間近な阿弥陀山までが、金色に光る粒子の中に横たわっている。朝七時に家を出て、県道を三時間歩き、大峰山の我が家から見ると反対側になる西側から登り始めた。

稜線伝いに阿弥陀山の方に戻ってきて、その頂上にある小屋の展望台から大峰山を振りかえった。それから急な下りを一気に降りたところが、阿弥陀山の登山口で、そこから家までは三十分である。休憩を含めて十時間、われながらよく歩いたものだ。感慨に浸りながら、歩いてきた山々を眺めた。

その夜私は家の前に出て、昼間歩いた山を再び眺めた。月明かりに阿弥陀山の稜線が黒々と盛り上が

っている。右の肩の辺りに、高圧線鉄塔の赤い灯が、夜の山の寂しさを際立たせている。目を凝らすと遠くに大峰山の姿も見える。私は、こんな夜にたったひとりで、あの暗い山中にいることを想像してみた。好天に恵まれて、うららかな日を浴びながら歩いていても、誰もいない頂上で風の音を聞くとき、孤独感に襲われるものだ。今日、私は十時間山の中を歩いてきたが、誰にも出会わなかった。人間だけでな

く、蛇にも猪にも兎にも狸にも、熊にも。目にした生き物といえば鳥だけであった。夜ともなると、孤独感と暗闇の恐ろしさは想像を超えるものではないだろうか。そして私は、そのような夜の山に惹かれるのをどうしようもなかった。

数日後私は、山行きの準備を整えて夜を待った。昼間の里山歩きとは違うので、考えられるだけの準

備をした。まだ九月だから、昼間なら寒さ対策は、アノラック一枚あれば充分であるが、ブラウスは厚手のものにし、汗をかいて冷えたときのために、下着の着替えもザックに入れた。道に迷って、じっと朝を待つことも無いとは限らないので、アノラックの下に着込む毛糸のセーターとチョッキも持った。天気予報では心配ないようであったが、一応雨合羽も持った。灯りは坑内で使うようなヘッドライトを、

故障も考えて二個準備し、予備の電池もずっしりと重くなるほど持った。それに、食料、水も普段より多めにした。その結果リュックはパンパンに膨れ上がり、肩にずっしりと重くなった。

午後十時、出発のときが来た。先ほどまで大峰山の上空に出ていた半月は、見えなくなっている。もう沈んだのであろうか。阿弥陀山の頂上から、月明かりに浮かぶ大峰山を見たかったのだが、だめかも

知れない。いま頭上には星が瞬いているが、全天が晴れ渡っているのではなさそうだ。予報では、今晩は一応晴れだが、ところによっては、大気の状態が不安定になるともいっていた。広い範囲のテレビの天気予報と、山沿いのここの天気とは一致しないことがよくあるが、基本的には崩れることはないらしい。

目指す阿弥陀山は、目の前に黒々と立ちはだかっ

ている。あの真っ暗な中に入っていくのだと思っただけで、恐ろしさでゾクゾクしてくる。

阿弥陀山の登山口は、山麓の別荘地の奥にある。途中で一度国道を横切るが、この時間、もうほとんど車は走っていなかった。悠々と横断していると、猛スピードの車が一台、渡りきったばかりの私のすぐ後ろを走り抜けて行った。

山麓の別荘地は静まり返っている。まだみんな寝静まってしまったわけでもあるまいが、明かりのついた窓はまばらである。腰の鈴の音がやけに大きい。別荘地を通る間それを手で押さえて歩いた。最後の民家の前を通るとき、家の人が玄関のところで何かしていた。私に気づいて見ているようでもあった。私はその人に気づかないふりをして通り過ぎた。こんな時間に、リュックを背負って山に入っていくの

を見れば、珍しさを通り越して、不審に思われたり、不気味がられたりしてもしかたがない。その最後の民家を過ぎると、それまで家々の明かりがあったわけでもないのに、さらに暗くなったような気がする。道が狭くなったせいもある。ここからヘッドライトを点けた。二、三メートル先の道に薄暗い楕円形の光の輪が、私の足並みに合わせて揺れる。やがて光を向けた前方に白い立て看板がぼんやり見えた。登

山口の案内板だ。いよいよ鬱蒼とした植林帯の中に入る。私は、見納めるような気持ちで空を見上げた。星がほとんど見えない。探すと一つだけぼんやりと光っていた。まだ晴れ間があるらしいので安心した。

登山道に入ると道は一段と狭くなり、両側から草が覆いかぶさっている。ヘッドライトの光で草の影ばかりが大きく動く。顔を上げると、道に近いところの木々が照らし出されるが、奥の方までは光が届

かない。だらだらとした登りが続いている。

一旦真っ暗な山道に入ってしまうと、離れたところから見たときの巨大な暗闇に押しつぶされそうな恐怖感は薄れるものだということがわかった。自分の周りだけしか見えないためかも知れない。そんなことを考えた直後であった。行く手に何かが光った。頬に鳥肌が立つのが、自分でもはっきりとわかった。私は凍ったように立ちすくんでしまって、その方向

を凝視した。また光った。動物の目だ。四つある。狸か狐か、あるいは犬か。私は光る目を見つめたままじっとしていた。向こうもじっとしている。このように目が光る動物は、暗闇の中でも見えると聞いたことがある。だからこちらからは、光った目しかわからないが、向こうはヘッドライトの光だけではなく、私が見えているのだと思う。ずいぶん長いこと睨みあいが続いたような気がした。四つの目はさ

っと消えた。私は、しばらくそのままの姿勢で様子を伺っていた。それっきり目は現れなかったので歩き始めようとしたが、足が前に出ない。怖気づいてしまったのだ。私はゆっくりと深呼吸をした。そして自分に

「だいじょうぶ」

と言い聞かせて、ゆっくりと歩き始めた。それからは、頻繁に周囲を見回し、うしろを振り返った。足

下で盛んに虫が鳴いている。それまでもずっと鳴いていたのかどうか、気がつかなかった。突然、キーッと鋭く鳥が鳴いた。その声は谷中に響き渡った。私は、立ち止まって、植林の奥を見極めようと目を凝らした。ヘッドライトの光が及ぶわずかな範囲に、林立する桧の幹がぼんやり見えるだけである。空を見ようとしたが、近くの枝と木の葉が見えるだけで、空が見えているのかどうかわからない。

急に周り中にパラパラと大きな音が広がった。あまりに突然だったので、怖さと驚きとで縮み上がったが、腕まくりした肌にひとつ、ふたつ雨粒がかかったので、状況が理解できた。しかし、出かけるときにかなりの星が出ていたので意外であった。一時間足らずの間に、雨空に変わってしまったのだろうか。私は、慌ててリュックから雨合羽を引っ張り出し、リュックには雨よけの覆いを被せた。そのあた

りから急登が始まった。雨合羽を着たが、雨はそれ以上ひどくならない。雨合羽の中で汗が噴き出して背中を流れるのがわかる。あまりの暑さに、再びリュックを下ろして雨合羽の上着だけ脱いだ。脱いだ雨合羽をリュックの外に挟み込んでからまた登り始めた。五分も歩かないうちに、にわかにあたりが騒がしくなった。雨脚が強くなったのだ。私は、また慌てて雨合羽を着た。雨は瞬く間に土砂降りになっ

た。たちまち道がぬかるみ、それだけでなく、道を川のように雨水が流れ始めた。ヘッドライトに道を流れ下る泥水が光る。足を踏み出す場所が見きわめられないくらいだ。踏み出した足は引っかかりを失って滑り、踏ん張っている後ろ足はずるずると滑り落ちる。私は、這いつくばるようにして、草に捉まり、木に捉まりながら体を引っ張り上げた。進んでいるのか、後退しているのかわからない。土砂降り

は続き、まるで滝の中にいるような喧しさである。その滝のような音に混じって、地響きのような低音が轟いた。次の瞬間、私がしがみつきながら登っている斜面と、植林の谷全体が、青白く瞬いた。私は漆黒に戻った上空を見上げた。ヘッドライトの弱々しい光の中を、雨粒が矢のように飛来して、顔にたたきつける。また光った。累々とした雲の重なりが照らし出され、そこら中が青白く輝くと同時に、バ

リバリッガシャーンと大音響が響き渡り、さらに続けざまに青白い光が襲いかかってきた。私は震え上がって、足が止まってしまった。上空を見まいとして俯いているのに、視界の隅に稲妻が走るのが見える。私は、木に捉まってその水流の中に突っ立ったままでいた。雨と稲光と雷鳴は激しさを増し、ゴーゴーという雨音と雷の轟音が立て続けに鳴り続ける。付近の山々に木霊するので、音に切れ目がない。私

はロープに追い詰められたボクサーのように、連打されるままになっていた。どれくらいそうしていただろうか、潮が引くように雨音が静まっていった。稲光と雷鳴は続いていたが、さきほどの威圧感はなくなってきた。あまりにも打たれすぎて、恐怖感が麻痺してきたのかも知れない。しばらくそのまま立っていると、滝のようだった道の流水はみるみる減ってきた。私は、滑りやすい急な登りを、歩幅を小

さくして登り始めた。あとどれくらいかかるかわからないが、とにかく頂上まで行けばコンクリート造りの小屋がある。なお続く稲光のたびにドキリとしながら、登り続けた。雨合羽の外も内も靴の中も水浸し、泥まみれである。ロープが張ってある急斜面では、まるでほふく前進のような格好で腕の力だけで攀じ登った。足場が軟らかくなっていてまったく踏ん張れない。

雨脚は、その後も強弱を繰り返したが、雷鳴は遠ざかっていく。しかし、稲光はいつまでたっても治まらない。見まいとしながらも、稲光の瞬間に木々に囲まれた狭い空を見ると、黒々とした雲の重なりが不気味だ。しかし、私は雷に慣れ始めていた。これまで私は家の中にいても雷が怖かった。それがいまは真っ暗な山中に、ひとりいるというのにその恐怖感に耐えている。

登りの傾斜がゆるくなった。植林の谷を急登してきた道が終わって、尾根筋に出たらしい。このあたりから雑木林の森になっているはずである。まだしばらくは登りが続くが、難所は過ぎた。ひっきりなしに瞬く稲光のおかげで、しばらくヘッドライトに頼らずに来たが、稲光の間隔が遠くなってくると、急に道が見えなくなったような感じだ。いつの間にかヘッドライトが消えている。ずっと点けっぱなし

だったので、電池が切れたのだろう。おそらくどろどろのはずの道にリュックを下ろし、手探りで電池を探した。ずっしりとした電池の包みは、リュックの一番下にもぐりこんでいた。リュックの中が濡れている。突っ込んだ手が濡れているのでそう感じたのであろうか。上半身を屈めて雨を避けながら電池を取り替えた。だが点かない。手の感覚を頼りに電池の上下を変えてみたがだめだ。真っ暗な中ではそ

れ以上原因を調べようもないので、予備のヘッドライトを使うことにした。すぐに見つかったが、電池が入っていない。前もって入れて置けばよかった。電池を入れてようやく明かりを取り戻した。その間、口の空いたリュックに雨がかかるままになっていた。いろいろなことに気が回らなくなっている。

陣を立て直して歩き始めた。尾根筋は、これまでに比べると歩が進む。少し下りになる。確かこのあ

とちょっとした登り坂を登りきると頂上の展望台のある小屋に出るはずである。それを思うと、足が軽くなった。暗さにも慣れてきて、家の前から夜の山を見上げて想像した暗黒の恐怖感も、いまはほとんど感じなくなっている。

初めて時計を見た。ガラスが濡れていて時針が見えにくい。一時半であった。昼間なら、家を出て一時間半もあれば頂上の小屋に着くのに、ここまで三

時間半かかっている。仕方がないだろう。濡れた背中や腹が冷たい。

最後の登りがすんで道が平坦になった。昼間ならもう小屋が見えているはずだが、今は見えない。そのとき、遠くの稲光があたりを照らした。道の前方に小屋が白っぽく見える。私は足を速めた。その瞬間右の脛に、バットで打たれたような衝撃を受けてつんのめり、顔から泥道に転んだ。ヘッドライトも

その弾みで泥水につかったが、幸いに消えなかった。体を起こして座り直し、転倒の原因を探した。倒木が道に半分突き出している。道の反対側にも切り株がのぞいているところを見ると、道をふさいでいた倒木を切断して、通れるようにしたもののようである。私は泥水の中に座ったままの姿勢で、ズボンの裾をまくって脛を見た。表面は擦りむけて血がにじんでおり、その周辺は膨れたようになっている。痛

みはあまりない。ズボンを元に戻して、立ち上がろうとしたら激痛が走った。しかたなく手を支えに左足だけで立ち上がった。立つことは出来たが、痛くて歩けない。けんけんを試みたが、飛ぶたびに右足に響いてとても続けられない。しかたなく小屋まで残りの二、三十メートルを犬のように四つんばいになって進み、屈辱的な気分で小屋に倒れこんだ。小屋はコンクリート造りで、イメージとしては、たと

えは悪いが公園の公衆便所に似ている。囲いはあるが、三方が開いている。

小屋に入ると、ヘッドライトのわずかな光が壁に反射して、周りがぼんやりと明るくなった。右の脛が脈を打つように痛み始めた。何か薬のようなものが塗りたかったが、けがに対する備えをまったくしていなかった。タオルが何枚かあることを思い出して、それを痛むところに巻きつけることにした。リ

ュックの中は、何もかもがジュクジュクに濡れている。荷物全体を大きなビニール袋に入れて、それごとすっぽりリュックに収め、ビニール袋の口も、水が入らないようにしっかり巻き込んだつもりであった。さっき電池やヘッドライトを取り出すときに入った雨のためだろうか。調べてみると、ビニール袋のリュックの背中に当たる側に、縦に一本切れ目が大きく入っている。荷造りのときに何かの角が当た

って切れたらしい。リュックの雨覆いは背中側にはなく、土砂降りの中を這いつくばって登っているときに、リュックと背中の間から入った雨水が、中に染み込んだのである。タオルも、着替え類もすっかり濡れている。全体を大きなビニール袋に入れた上で、さらに一つ一つのものをビニール袋に入れるべきであった。それでも、泥で汚れていないのでたすかった。私は、タオルを引っ張り出して、脛にきつ

く巻いた。そのためにズボンの裾が下ろせなくなった。裾を切り裂いて下ろすにも、はさみもカッターもない。装備の欠陥がいろいろあるものだ。ズボンはまくったままにして、雨合羽の裾だけを下ろした。

寒くはない。むしろ頬に当たる空気は生暖かいくらいだ。それなのに、震えで奥歯がカタカタする。ぐっしょり濡れた衣類が、雨合羽の中で肌に触れるのがゾクゾクしだしたのだ。このときのために持っ

てきた着替えは濡れて役に立たない。雨合羽を脱ぎかけたが、寒そうな気がしてそのままで、体温が冷たさに競り勝つのを待つことにした。

時計を見た。午前二時を少し過ぎていた。何か食べよう。携帯用のバランス栄養食の外箱は濡れていたが、二重の包装のおかげで中身はまったく濡れていない。うまかった。一箱分を一気に食べた。もう二箱残っているはずだ。リュックの中をまさぐって

それを確かめていたとき、唸り声のような音を聞いたと思った。そのとき、小屋を伝う雨水がチョロチョロ流れる音が続いていたが、いましがたまで聞こえていたと思ったザーッザーという、耳慣れてしまった雨音は静まっている。山の中での雨音は大きい。その上あの土砂降りと雷の中に長くいたために、音に対して警戒心がなくなっていた。私は気にもとめないでリュックの中を探し続けた。確かにもう二箱

あるはずだが、確認しないと不安である。そのとき唸り声が、今度ははっきりと聞こえた。ハッとして顔を上げた私は、全身の血が凍ったと思った。暗闇を背にして巨大な黒い獣が私のほうを睨んでいるではないか。赤い目が燃えているように見える。私はいまここでこの獣に食われて死ぬのだと直感した。タオルを巻いて投げ出していた足が、獣に近いので、静かに膝を立てるようにして引き寄せた。しかし獣

は、すぐに飛びかかる風には見えない。少し落ち着いてよく観察した。獣は巨大というほどではなく、大型のシェパードのように見える。野犬かも知れない。犬は牙もむいていないし、襲いかかりそうにもないので、私はさらに落ち着いてきた。首輪をしている。それでも、追い払う勇気はなかった。成すすべもなく睨み合いが続いた。どれくらい時間がたっただろうか、犬の背後の暗闇から、濡れた道を踏む

足音と口笛が聞こえた。犬は、飛び上がるように向きを変えて、口笛の方に走っていった。飼い主が一緒なのだ。でも、こんな時間にいったい誰だろう。懐中電灯の光が踊りながら近づいて来た。暗がりの中から先ほどの犬が、また走り寄ってきた。

「クロ」

強い調子で犬を制する声がして、声の主が私のヘッドライトの及ぶ範囲に入ってきた。体格のいいヘミ

ングウェイを思わせる髭面の男であった。
「無事でしたか？」
その人は太い声で私に話しかけた。山用のステッキを一本持っただけで荷物はなく、着ているものも半そでのティーシャツという軽装である。ただ、シャツはすっかり濡れているし、ズボンは泥だらけだ。傍の犬は、先ほどの警戒した様子とは打って変わって、尻尾を振りながら、私と主人の間を行ったり来

たりしている。
　私は、どうしてここに人が登ってきたのか、わけがわからなかった。
「驚かせてすみません。心配しないでください。僕はこの麓に住んでいる者です。さっきあなたが山に入っていくのを見かけたのですが、そのあと物凄い雷雨になったので、気になって来てみたのです」
私は、別荘地を歩いているとき、最後の家の玄関先

に人がいたのを思い出した。
「こんな夜中に、私を助けに来てくださったのですか？」
「いや、特に助ける必要があるとも思いませんでしたが、ちょっと夜の山に登る方に興味があったものですから。犬に驚かれたと思いますが、すみません。でもこいつは絶対に人に危害は加えません。救助犬として訓練されていますから」

その人は、私が先ほどからまったく姿勢を変えないことに気づいて、
「けがをされたのですか？」
と言って、私の右足を調べてくれた。私の脛を押したり引いたりしながら、痛いかどうかを訊いたりした。そして、単なる打撲だろうと言った。私は、あまりの痛みに、骨折しているに違いないと思っていたので少しほっとした。

この人は、別荘を拠点にして小説を書いている吉田という者だと自己紹介した。

吉田さんは、私がかすかに震えているのを見て、

「明るくなるまで待って下山すれば安全ですが、まだだいぶ間があるし、明け方には気温がもっと下がります。私はここの道をよく知っていますので、何とかこれから下りましょう。私の家までなら背負ってでも行けますよ」

と言ってくれた。私は吉田さんの助けを借りざるを得なかった。

吉田さんは、私のリュックを背負い、私の右側に付いた。私は吉田さんの肩に右腕を回して右足を使わずに歩くようにした。吉田さんの懐中電灯を、私が左手に持って足元を照らすことにした。そのようにして小屋を出たとき、雨はもう降っていなかった。最初の平坦なところは多少道幅もあって調子よく進

んだ。しかし、道幅が狭くなると俄然大変になった。吉田さんは、私が道から外れないようにしようとして、自分はしばしば草の根やでこぼこに足をとられそうになった。

犬は、まるで私たちを先導するように軽い足取りで前の方を行くが、私たちがあまりにも遅いので、先に行っては目を光らせながら戻ってくるのであった。

急な下りになってからが、地獄の苦しみとはこのことかと思うほどであった。吉田さんは体重六十五キロの私を、ほとんど抱きかかえるようにしながら、文字通り一歩一歩進むのだが、ぬかるんだ暗い道は、吉田さんにとっても手をつき、膝をつき、転びながらしか進めなかった。私は痛む方の足を使わないわけにはいかなかったが、右足を地面につくと、痛みで膝を折り曲げてしまいそうになる。そのたびに、

ただでも不安定な吉田さんにしがみつくことになる。私は痛くても声を出さないように、顔をゆがめながら堪えた。顔はいくらしかめても、暗くてわからないだろう。自身息を荒くして懸命なのに、終始私を気遣い励ましてくれる吉田さんに対して、私は心の中で、安易に夜間登山などをしたために、見ず知らずの人にとんでもない迷惑をかけていることを謝り、発見してくれたことを感謝し続けていた。

下りが永遠に続くように感じられた。普通なら三十分のところを、二時間かかってやっと登山口にたどり着いた。私だけでなく、吉田さんも疲れきった様子である。途中でも三歩行っては休み、五歩行っては休むという具合であったが、登山口では長い時間休んだ。午前五時。空が白んで、知らないうちに足元もライトなしで見える。私は、闇の世界に幕が下りて、明るい世界が始まるときの敬虔な雰囲気に

感動した。本来は山の中で、自分ひとりで味わうはずであった気分だが、今こうして救助されたあとでも、十分に感動的であった。

「さあ、もう一息です」

吉田さんがそういって立ち上がった。私も吉田さんに支えられて立ち上がろうとしたが、激痛で立てなかった。酷使して麻痺しかかっていた右足の神経が、休んでいる間に息を吹き返したようだ。

あとで聞いたところによると、そこから吉田さんの家までの約一キロを、吉田さんは私を背負って歩いたのだそうである。私は、吉田さんの背中で気を失っていたのかも知れない。

吉田さんは山を舞台にした小説を多く書いており、夜の山、雪の降りしきる山や霧に閉ざされた山、台

風に荒れ狂う山を自ら体験しながら、書いているのだそうだ。それで、私が夜の山に入っていくのを、偶然見かけて、強い興味を持ったということであった。

私の足は骨折していた。それから何か月もギブスの生活となった。私は、ギブスの足を椅子に投げ出して、毎日阿弥陀山を眺めて暮らした。

【完】

（この物語は、フィクションであり、実在する人物等とは一切関係ありません）

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

阿弥陀山

2022年9月10日初版発行
著者：山中與隆
編集：山中伶子
表紙素材元：www.photo-ac.com
タイトル：美しく神秘的な夜空
作者：Arnoldさん
写真のID：23940871
©Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com